

## 第8回 日本アマチュア天文研究発表大会

佐久間 精一\*

1975年10月19日に上記の会が諏訪市で開かれた。本誌にも予告が時折掲載されるので所謂プロの方でもこの大会が毎年開かれることに気付いて居られると思う。前回迄の経過と第8回大会の状況を報告させて戴く。

第1回は日本天文研究会、川崎天文同好会共催で『天文好きな私共アマチュアは日頃それぞれのテーマや目標をもって観測や研究にいそしんでいます。それらの資料はお互いに交換、公開することによって幅の広い資料となり今後研究を進めていく上にも他からいろいろと助言されてプラスとなることでしょ。』との呼びかけで東

日本アマチュア天文研究発表会として川崎で開かれた。東日本との名称ではあったが全国から参加者がありアマチュアの横の連繋を強化するため全国大会として定着する様にとの要望が強く、第2回以降毎年欠かさず開かれている。丁度この頃から天文学会の運営が再検討され、アマチュア活動をどう位置づけるかが問題になってきた時期である。

一つの同好会だけでなく全国的規模のアマチュアの大会で1975年に開かれたのは、第5回彗星会議(天文月報1975年9月号長谷川一郎氏記事参照)、第16回流星



第8回大会記念写真諏訪市民センター前庭。

会議があり、新しい試みとして Stellafane meeting (1925年以來開かれているアメリカのアマチュア最大の集会。自作の望遠鏡を持って1,600人も参加する) にならった第1回「星空への招待」も行われた。世界的規模の会合としては IUAA (International Union of Amateur Astronomers) の大会が1969年にはイタリアのポローニヤ、1972年にはスウェーデンのマルモで開かれている。前回迄の大会の概要を、開催日、開催場所、発表件数、特別講演があった時は講師名と演題の順で記す。

\* 日本揮発油(株), S. Sakuma:  
8th All Japan Amateur Astronomers Meeting.

第1回 1967-5-14, 川崎市産業文化会館, 19, 神田: 古暦の研究。

第2回 1969-11-9, 同前, 17, 神田: 変光星調査の思い出, 古畑: 観測のいろいろ。

第3回 1970-10-11, 諏訪市民センター, 18, 木辺: レンズ研磨 50年の回顧。

第4回 1971-10-24, 仙台市民教養センター, 19,

第5回 1972-10-29, 明石市立市民会館, 18,

第6回 1973-10-28, 川崎市産業文化会館, 24, 神田: アマチュアに協力願いたき変光星と小惑星の観測。

第7回 1974-9-22, 岐阜天文台, 21, 森久保: 法隆

寺五重塔落書「六月肺出」について。

今年の大会当日は前日からの雨もどうやらあがり会場の諏訪市民センターでは午前9時の受付開始時には行列ができる程の盛会であった。毎回の事ながら開催地の地元の方々のお骨折りは大変なもので今回も主催の諏訪天文同好会々員、高校生の方々がお世話下さった。ここで北は北海道浜頓別から南は徳島、広島、山口と全国各地からの参加者約260名が登録をすませた。定刻の10時に諏訪天文同好会長五味一明氏の開会挨拶で会は始まった。諏訪市教育長殿の祝辞のあと、東亜天文学会能田忠亮会長の「組織的アマチュアの天文活動が始まって以来55年……」というメッセージを佐伯副会長が代読された。またこの時は間に合わなかったが丁度当日届いたAAVSO会長Janet Akyüz Mattei女史のメッセージも午後には披露された。

盛り沢山のプログラムを消化するための進行係は開舜衛氏、座長は下保茂、村山定男、長谷川一郎氏等がつとめた。研究発表は分科会のものを含めて午前13件、午後5件行われた。いくつかを紹介すると、諏訪の藤森賢一氏の「黒点活動領域における白斑観測の重要性」に始まり、羽田時雄氏のアフリカ日食のコロナの写真測光、尾形斉氏の白鳥座新星の光電観測、鈴木雅晴氏の同新星の分光観測などはアマチュアが利用し得る観測機械の質の向上を示すものであった。武石信之氏の明治時代の天文観測地や渡辺泰行氏の自作30cm機による木星などのカラースライドも興味深いものであった。重久長生氏のエロスの眼視光度観測、藪保男氏の本年のペルセウス流星群の出現状況などはアマチュアの伝統的活動分野からの報告である。また群馬県前橋高校の渡辺康弘、泉潔氏は県下6高校の天文地理グループのペルセウス群の観測のまとめを報告された。

今回の大会の特徴は分科会の討議及びそのまとめの全体会に2時間以上もの時間を割当てたことであった。小部屋に分れてベテランの座長を囲んで質疑、討論を行う分科会は毎回評判がよく、特に若い参加者には良い刺激になるらしい。各分科会の主な話題を紹介すると、太陽(観測結果死蔵の防止、学校天文部の観測)、日食(1976年10月23日のオーストラリア皆既日食)、惑星(火星木星の近況)、月(月をどう観測研究するか、亀裂及びドームを統一したアップに)、掩蔽(限界線観測)、流星(彗星関連流星群、-4等のペルセウス群火球)、彗星(最近日本で発見された3彗星について、三枝氏の発見事情)、変光星(X線新星A0620-00、AAVSOより要請のYZ CMiの人工衛星によるX線観測との同時眼視観測、変光を疑われている星の確認観測)などであった。過去の大会では上記の8分科会以外に、小惑星、流星塵、天文史、天文民俗などの分科会が設けられたこともあっ

た。参考までの各分科会の登録人数(実際の参加者数とは若干異なる)は、流星55、彗星47、太陽40、変光星30、惑星23、日食14、月6、掩蔽1である。

つぎに諏訪の出身の元東京天文台長の古畑正秋氏の「変光星の発見について」と題する特別講演が行われた。内容は自宅で35mm判カメラに200mm F4の望遠レンズをつけ10分露出のCMiとCncの星野写真の2年間分、数十枚を調べて5ヶケの新星が見付かったというものであった。退官後もこの様に観測を続けて居られるの一同多大の感銘をうけた。

プログラムもいよいよ終りに近づき、回転サーチライト禁止運動の日本星空を守る会の報告、次会開催地札幌の札幌天文同好会長福島久雄氏の挨拶の後、閉会式に移り今井正明諏訪天文同好会副会長が、ポアンカレの天文学への賛辞を引用されて閉会の辞を述べられた。

引続いての懇親会は青木正博氏司会の下に、古畑氏の乾杯により開会し、東京天文台の冨田弘一郎、神田泰両氏の御参加も得て仲々の盛会であった。テーブルスピーチに歓談に時間はたちまち経過し、ビールのまわった川崎天文同好会々員によるアマ天讃歌が歌われる頃は閉会の予定時刻19時となっていた。来年の再会を約して札幌の福島氏の音頭によって万才を三唱し予定されたプログラムは全部終了したのであった。開会式の諏訪市教育長殿の祝辞にあったように「今夜はゆっくりと温泉につき明日もまた熱心な研究発表を……」というわけにはゆかず、七夕と同じく1年に1日だけの大会を終えると大部分の参加者は翌日の勤務又は学業のためあわただしく帰途につくのもアマチュア大会の通例である。

なお大会前夜に、前回迄の大会の実行委員有志が集まって今後のこの大会の運営を協議して、名称は第 回日本アマチュア天文発表大会とする、集録は必ず作製する、主催者は6ヶ月前には日程を広報するなどの申合わせが行われた。今後はプロの方々も多数御参加下さり御指導いただくことにより、この大会がますます充実発展することを願っている。

## 掲 示 板

### 第6回 彗星会議開催

本年の彗星会議は、次の通り開催されます。

日 時：1976年3月27日(土)、28日(日)の2日間  
会 場：仙台市天文台(仙台市桜ヶ岡公園)

くわしくは返信用封筒を同封の上2月末日までに下記宛お問合せ下さい。

〒980 仙台市木町11-14 植木アパート B-5  
笠原 紳